

KITOGO-HAN 木と合板

木とひと、暮らしを結ぶ誌上博物館

SUMMER 2013

22 夏号

- 夏休み特集—東京おもちゃ美術館で遊ぶ
赤ちゃんからお年寄りまで
一緒に遊べるビッグで楽しい
おもちゃ箱
おもちゃ箱の中は「木」がいっぱい！木育のスタートするひろば
- レポート！木の最前線
都心に出現した新しい交流型のビジネス空間
イトーキ東京イノベーションセンター《SYNQA》の提案
都心のオフィスを「木」で満たすという試み
- 新木場漫步
銘木専門商社から総合木材商社へ
思いきった業態進化で、
新しい木材流通のビジョンを探る
株式会社 銘林
- 新木場 夏のトピックス
くらしと森林・木材の放射能をめぐるテーマで、
公開シンポジウム開催



博物館からのお知らせ



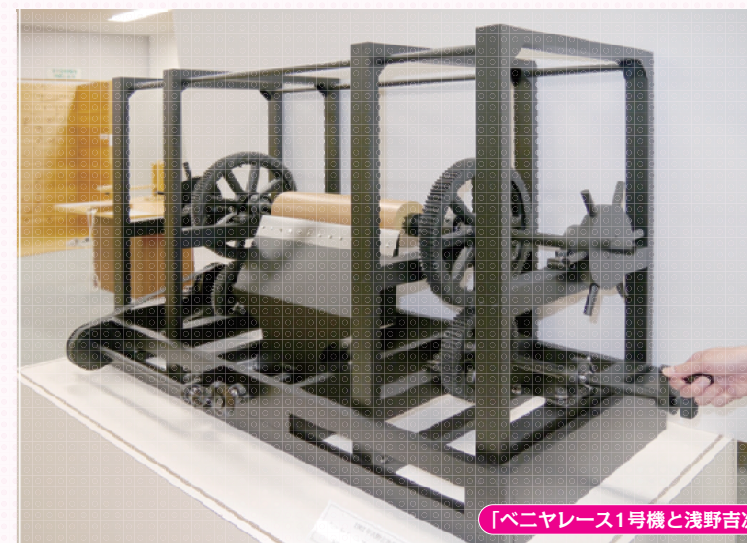
ベニヤレース初代 1 号機の模型が、 新たに展示に加わりました

今年6月、ベニヤレース1号機の模型が、木材・合板博物館の展示に新たに加わりました。

合板製造は、原木から単板を剥き出す機械、ベニヤレースの開発によってはじめて可能となりました。その1号機は明治40（1907）年、浅野吉次郎の手によって完成し、その功績から浅野吉次郎は「日本の合板誕生の父」と呼ばれることになりました。

博物館は昨年開館5周年に際し、「浅野吉次郎コーナー」を開設し、氏の功績を示す数々の資料を展示しています。これら貴重な資料は、中日本合板工業組合のご厚情によって博物館に移設されたものです。

同コーナーに新たに加わった模型の大きさは、実物の約1/3スケール、手で動かすことが出来ます。博物館は現代のベニヤレースの実演展示を行っています。ベニヤレース初代1号機から、現代のベニヤレースまで、合板製造技術の歴史を見ることができるようになりました。



「ベニヤレース1号機と浅野吉次郎」について詳しくは、次号で



木材・合板博物館のご案内

アクセス 東京メトロ有楽町線
JR京葉線
東京りんかい高速鉄道
東京メトロ東西線
新木場駅 → より徒歩7分
東陽町駅 → よりバス
②のりば/木11甲・木11折返
新木場一丁目バス停 より徒歩1分

開館時間 10：00～17：00（最終入館時間16：30）

入館料 無料

休館日 月曜日、火曜日、祝日 年末年始

*都合により開館日・時間を変更することがあります
*幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
*団体での見学は事前にお申し込みください。

表紙：国産材おもちゃ「森のどうぶつみき」（オークヴィレッジ株式会社、岐阜県高山市）。「グッド・トイ2013」「林野庁長官賞」を受賞。（本誌 夏休みの特集参照）

木と合板 第22号 2013年9月1日発行 定価：525円（消費税込）

発行：特定非営利活動法人 木材・合板博物館
〒136-8405 東京都江東区新木場一丁目7番22号（新木場タワー）
TEL.03-3521-6600 FAX.03-3521-6602 Eメール:info@woodmuseum.jp

編集：「木と合板」編集委員会
制作：株式会社デジタルアート



特定非営利活動法人 木材・合板博物館

<http://www.woodmuseum.jp>

木材合板 で 検索 クリック!!

KITOGO-HAN 木と合板

木とひと、暮らしを結ぶ誌上博物館

SUMMER 2013

22 夏号

- 夏休み特集—東京おもちゃ美術館で遊ぶ
赤ちゃんからお年寄りまで
一緒に遊べるビッグで楽しい
おもちゃ箱
おもちゃ箱の中は「木」がいっぱい！木育のスタートするひろば
- レポート！木の最前線
都心に出現した新しい交流型のビジネス空間
イート・東京イノベーションセンター《SYNQA》の提案
都心のオフィスを「木」で満たすという試み
- 新木場漫步
銘木専門商社から総合木材商社へ
思いきった業態進化で、
新しい木材流通のビジョンを探る
株式会社 銘林
- 新木場 夏のトピックス
くらしと森林・木材の放射能をめぐるテーマで、
公開シンポジウム開催



博物館からのお知らせ



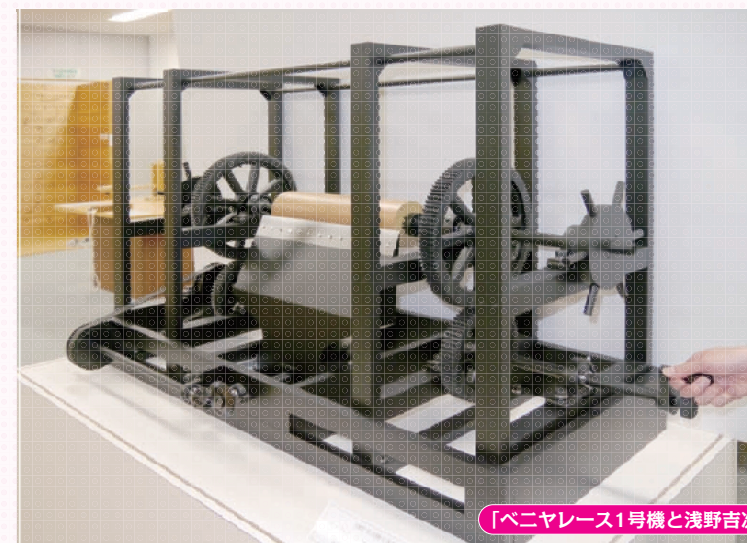
ベニヤレース初代 1 号機の模型が、 新たに展示に加わりました

今年6月、ベニヤレース1号機の模型が、木材・合板博物館の展示に新たに加わりました。

合板製造は、原木から単板を剥き出す機械、ベニヤレースの開発によってはじめて可能となりました。その1号機は明治40（1907）年、浅野吉次郎の手によって完成し、その功績から浅野吉次郎は「日本の合板誕生の父」と呼ばれることになりました。

博物館は昨年開館5周年に際し、「浅野吉次郎コーナー」を開設し、氏の功績を示す数々の資料を展示しています。これら貴重な資料は、中日本合板工業組合のご厚情によって博物館に移設されたものです。

同コーナーに新たに加わった模型の大きさは、実物の約1/3スケール、手で動かすことが出来ます。博物館は現代のベニヤレースの実演展示を行っています。ベニヤレース初代1号機から、現代のベニヤレースまで、合板製造技術の歴史を見ることができるようになりました。



「ベニヤレース1号機と浅野吉次郎」について詳しくは、次号で



木材・合板博物館のご案内

アクセス 東京メトロ有楽町線
JR京葉線
東京りんかい高速鉄道
東京メトロ東西線
新木場駅 → より徒歩7分
東陽町駅 → よりバス
②のりば/木11甲・木11折返
新木場一丁目バス停 より徒歩1分

開館時間 10：00～17：00（最終入館時間16：30）

入館料 無料

休館日 月曜日、火曜日、祝日 年末年始

*都合により開館日・時間を変更することがあります
*幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
*団体での見学は事前にお申し込みください。

表紙：国産材おもちゃ「森のどうぶつみき」（オークヴィレッジ株式会社、岐阜県高山市）。「グッド・トイ2013」「林野庁長官賞」を受賞。（本誌 夏休みの特集参照）

木と合板 第22号 2013年9月1日発行 定価：525円（消費税込）

発行：特定非営利活動法人 木材・合板博物館
〒136-8405 東京都江東区新木場一丁目7番22号（新木場タワー）
TEL.03-3521-6600 FAX.03-3521-6602 Eメール:info@woodmuseum.jp

編集：「木と合板」編集委員会
制作：株式会社デジタルアート



特定非営利活動法人 木材・合板博物館

<http://www.woodmuseum.jp>

木材合板 で 検索 クリック!!

赤ちゃんからお年寄りまで 一緒に遊べるビッグで楽しい おもちゃ箱



おもちゃ箱の中は「木」がいっぱい！
木育のスタートするひろば

—ここは、小学校の校舎ですよね

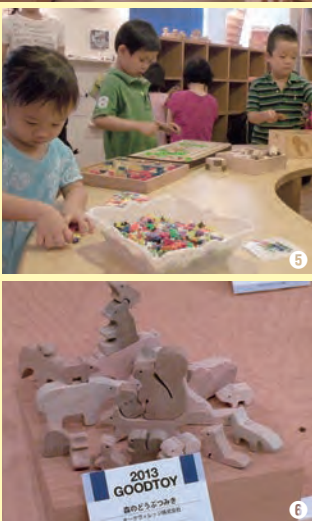
昭和モダンの面影を残す校舎

旧四谷第四小学校の校舎は昭和11年（1936年）竣工で、関東大震災の教訓から防災に強い校舎として設計されました。片側廊下、片側教室という造りは、全員が5分以内に校舎外に避難できることを考えた仕様で、その後の学校建築の基本形となりました。当時は復興小学校と呼ばれていたそうです。この玄関ビロティにある3本の太い柱など、70数年前とは思えないモダンな造りが地域から愛されて、廃校になる前から歴史的建造物として遺したいと、地域の人たちが区にはたきかけていました。今ここは、地域住民ボランティアなどを中心にした「地域ひろば」、NPO CCAアートプラザ（市民の芸術活動推進委員会）、東京おもちゃ美術館の3団体で協同活用、

運営をしています。全国でも珍しい廃校活用の仕方です。東京おもちゃ館は校舎内の11の教室を利用しています。

—階段をのぼった階が受付。館名のプレートに並んで名前が記された積み木が壁一杯に嵌め込まれています。タレントさんの名前もみえます。

一口1万円、「一口館長」という寄付を呼びかけて最初の改築費用を賄いました。これは寄付して下さった一口館長さんたちの名前です。私たちはNPO団体なので寄付金とボランティアで運営されています。館内の赤いエプロンのスタッフは、みなさん「おもちゃ学芸員」と呼んでいるボランティアさんで現在220名余の方が登録されています。今日も14、15人の方がスタッフとして来てくださっています。この力なしに私たちの活動は1日たりともなりたちません。



- ①ピロティ
- ②一口館長の積み木
- ③一口館長について説明する石井さん
- ④日本産のグッド・トイを展示販売するミュージアムショップ
- ⑤子供たちはそれぞれの遊びに夢中
- ⑥「グッド・トイ2013」「林野庁長官賞」に輝いた「森のどうぶつみき」
- ⑦グッド・トイ2013を展示しているグッドトイの部屋



ミュージアムショップ 日本のおもちゃで遊んでもらいたい

かつては個人経営のおもちゃ専門店があったのですが、今は「まちのおもちゃ屋」さんを見かけることが少なくなりました。みなさんがおもちゃを求める店は、外国資本の大型量販店や家電量販店のゲームソフトのコーナーなどではないかと思っています。そのおよそ9割は外国製品。アメリカ、中国、東南アジア製…。あとは趣味のいいママたちがヨーロッパ製を求めるとか。ここでは（写真④）、日本で作られたおもちゃを中心に展示販売しています。少子化のなかでせっかく日本に生まれた大切な子たちが、日本のおもちゃを知らないで育つのはあまりに残念です。もっと日本のおもちゃで遊んで育ってもらいたいというこだわりがあります。

グッド・トイ展示室 いいおもちゃのキーワード、 「コミュニケーション」

このグッド・トイの部屋（写真⑦）は、日本グッド・トイ委員会が選定した良質のおもちゃを展示しており、今年の「グッド・トイ2013」も展示しています。ところでグッド・トイを直訳すると「いいおもちゃ」ですが、いいおもちゃの基準は何だと思いいになりますか？ 人それぞれの答えがあつて、一言では括りきれない難問ですよね。私たちは、あえてその基準を「コミュニケーション」というキーワードに求めています。初めて出合った人同士、違う世代の人同士、外国人同士、障害を持つ人と健常者の人同士。仲良しになれる、話が弾む。そんな人と人を繋げるモノとして、おもちゃを捉えてみたいと考えています。

これは今年選定されたグッド・トイのコーナーです。この「森のどうぶつみき」（写真⑥、本誌表紙写真）は、「グッド・トイ2013」とならん

で「林野庁長官賞」を受賞したおもちゃです。岐阜県のオークヴィレッジというメーカーさんが作った積み木です。樹種は日本産の5種が使われ樹種名も刻まれています。香りや色、手触りを感じることができます。どうぶつたちはそれぞれがいや親子になっていて、積み木だけでなく、動物園を作る遊びもできます。

日本グッド・トイ委員会は、人材育成講座として「おもちゃコンサルタント」養成講座を事業の一つとして開講してきました。そこで生まれたおもちゃコンサルタントが全国に5千人います。その方々はそれぞれ保育園や、介護の現場、病院などのフィールドで活躍されていますが、その人たちが自身のフィールドで役にたったり、いいと思えたものを、グッド・トイとして推薦し、それを全国での投票や体験会を経て、その年のグッド・トイが選定される仕組みになっています。どちらかというと、「本屋大賞」と似た選考プロセスですね。



館内を見て回った後、法人運営部部長の山田心さん（右）、赤ちゃん木育事業部の石井今日子さん（左）のお二人に、日本グッド・トイ委員会、東京おもちゃ美術館の事業、ウッドスタートプロジェクトについてお話を伺いました

東京おもちゃ美術館
TOKYO TOY MUSEUM



美術館正門前(上)美術館入口(下)

- ①廊下の展示
- ②親子で学ぶおもちゃこうぼう
- ③赤いエプロンのおもちゃ学芸員のお姉さんが教えてくれます
- ④ゲームの部屋
- ⑤速さと判断力が問われるサッカーゲーム
- ⑥ここではおもちゃ学芸員さんが遊び方を教えてくれる。リタイヤしたお父さん、おじいさんも活躍する場



要は、現在は国内では減少傾向で、いろいろなモノを作って再起をかけて頑張つてらっしゃいます。このおもちゃは実際にそろばん工場の工程の一つで、私どもの館長が遊びのようで面白と言ったことがきっかけとなって製作されることになったおもちゃです。

この教室を美術館に改修するにあたって、耐震性の問題から校舎の梁や柱に手を加えるのはかなわなかったで、小屋の造物物を教室の中に作ることにしました。青森県の大工さん、建具屋さん、漆職人さんなど職人さんたちが集まって、みんなでおもちゃを作ろうと「わらはんど」というグループを立ち上げました。これらの小屋はわらはんどさんが作ってくれたものです。わらはんどは青森の言葉で子どもの意、ハンドに手という意味も込めています。

おもちゃ(こ)ぼう

おもちゃ学芸員は、それぞれに得意の分野をお持ちです。自然物からいろんなものを作ったり、木工でガラガラを作ったり、手品を作ったり…この工房(写真②)は、その作り方を皆さんに教える教室です。親子でおもちゃづくりを楽しんでいただけます。今日のテーマは風ぐるまの作り方です。

ゲームの部屋

こころの成長を支える、人とおもちゃ

いま、小学生の子が遊ぶおもちゃが少ないように思います。圧倒的なのはテレビゲームやタブレットを介したデジタルゲームソフトが主流で、それはコミュニケーションの要素に乏しい。そんな中で、ボードゲームが見直されてきています。私たちが子どもの頃には、野球盤ゲームやボーリングゲームなど、一世を風靡するボードゲームが流行したものです。



このゲームの部屋(写真④)にはさまざまなボードゲームを置いています。おもちゃ学芸員は作り方も教えますが、遊び方も教えます。囲碁、将棋に始まってバックギャモン、オセロとか、この館ではその道のプロの人が教えにきてくれますので(写真⑥)、ときどきとても強い小学生も誕生していますよ。

このサッカーゲーム(写真⑤)は、テーブルサッカー協会日本女子代表選手のOLさんでもある方が毎月教えにきてくれています。めちゃくちゃ強いですよ、目にも見えないぐらいの速さでボールを動かします。そんな人に教えてもらおうと子どもたちも夢中です。オセロのチャンピオンの学芸員さんもいますし、囲碁、将棋の女流棋士の方も教えにきます。すでに仕事を引退された学芸員の方も活躍いただいています。

ゲームは勝ったり負けたり遊びです。今日は負けても明日は勝てるかもしれない。今の子はそういう遊びに尻込みする子もいます。小学校も高学年になると、囲碁や将棋など偶然性によらないものに挑戦できるようになり、勝敗の意味を自分で考えるようになります。負けて悔しいことも勝つてうれしいときも、そうした経験を積みながら成長してもらいたい。その道の学芸員さんたちはそうした経験をフォローできるプロの人たちでもあります。心が成長していく段階をここでは大切にしたいと思っています。



—今年のグッド・トイセレクションには木製のおもちゃが多いですね

おもちゃは木製品だけとは限りません。樹脂製もあれば、昔懐かしい布製もあります。私たちが木製のみを推しているわけではありません。でも、木のおもちゃに人気があるのはなぜでしょうか。これも難問ですね。一言では言い切れません(笑)。

企画展示室

健やかであれという祈り

郷土玩具・人形

こは、そのときどきの企画展示を行っている部屋で、今は郷土玩具、主に人形を展示しています。これらは、小泉正直さんという方の所蔵コレクション(写真①②)で、古い郷土玩具にもかかわらず、ひじょうに保存状態が良いので大変に美しい状態で鑑賞いただけますが、多くは80年以上前のもので現在は作られていないものがほとんどです。

このお人形の名前は「奉公(ほうこう)さん(写真③)」、香川県の高松張子(たかまつはりこ)です。高松張子には、鯛持ち戎(たいもちえびす)、獅子頭、張子虎など百種類ぐらひありますが、「奉公さん」はその代表格です。「オマキという娘が奉公先の病氣のお嬢さんの身代わりとなって自分に病をうつして世を去った」という口伝があり、奉公さんは嫁入り人形、子どもの病氣を治す人形として重宝されました。乳児や幼児、子どもが病を得て早く亡くなるが多かった時代、子どもが健やかな成長は親の切実な願いであり、祈りでもありました。そんな愛しみの心が、人形の愛らしさを通して伝わってきます。

このお人形(写真④)はよくあるモチーフの一つ「饅頭食い」で、各地に伝わっています。両手に二つに割ったお饅頭を持っていますね。今でも、お子さんに「お父さんとお母さんのどっちが

好き?」などと聞かれた方が困ってしまう、意地の悪い質問をすることってありますよね、でもこの子はとても賢くて、二つに割ったお饅頭はどうしても美味しくて、どちらがどっちなんて言えませんが表現しています。七五三はそれまで子どもが無事に育ったことを祝うものだったとも言われますが、無事に育ってくれたら今度は賢い子に育ってもらいたいという、親のきりのない(笑)希望も表しています。人形笛には、子どもが食べ物に喉に詰まらせて死なないように、笛を吹くことで喉を鍛えてやりたい願いも込められています。

昔は、子ども一人ひとりに玩具を与えるような豊かさはありませんでした。年の何度かハレの日に、家族の願いを表すものとして買われていたんです。子どもの成長は家族の願いでもありました。子ども一人ひとりにそれぞれおもちゃが与えられる時代になったのは、ここ数十年の最近のことなんです。

おもちゃのもり

職人さんたちの創意が集まった部屋

最初は私たち「木のおもちゃ」に特別な思い入れがあったわけではありません。日本の「木のおもちゃ」文化も盛り上げたいという意図でした。ところが、ここがご覧のように子供たちに大人気の部屋になりました。「木の砂場(写真⑤)」は子供たちの一番のお気に入りです。ナラ、イチイなどの北海道産の広葉樹、針葉樹で作った2万個のボールが入っています。室内は九州産のヒノキを敷き詰めていますので、ここでは靴を脱いでお楽しみいただいています。(写真⑥)

この場所は、全国のおもちゃ職人さんとのネットワークがあり実現した部屋で、各地の地域材の魅力も感じて楽しんでいただける部屋になりました。これは兵庫県小野市が産地の播州そろばん作り体験遊具。(写真⑧)ご存じようにそろばんの需

- ①とんがったものはどこにもない、赤ちゃん木育ひろば。ここでは、お母さんたちもリラックス
- ②有馬晋平氏作のスキコダマのトンネル。赤ちゃんはここをくぐるのが大好き
- ③④ママと一緒に
- ⑤スキのベンチ
- ⑥積み木は樹種ごとに整理
- ⑦京都の北山杉でできた木のおもちゃ



※木育
「木育」とは、木と関わることで、木に対する親しみや理解を深めることにより木を生活に取り入れ、自ら森作りに貢献する人の育成を目指す活動です。(農林水産省広報誌aff 2012年10月号特集「木づかい」のススメより)

赤ちゃん木育ひろば スキの柔らかさに包まれる部屋

この部屋(写真①)をどんな材で作るのがいいか、あらかじめ大工さんや林業関係者の方にリサーチしたところ、皆さん、赤ちゃんだったらスキが柔らかくていいでしょうというご意見でした。そこでボランティアさんたちと一緒に多摩のスキ山に入って、そこで森林がいかに放置された状態にあるかも学ぶことから部屋作りをスタートさせました。この部屋は各地のスキ材を用いて作られています。壁と床には多摩産証材のスキを使っています。そのことで助成金をいただくこともできました。

スキ材と付き合い始めたことで、スキコダマというオブジェと出会うことになりました。これは大分県の造形作家、有馬晋平さんのオブジェ、スキコダマです。今回この部屋を作るにあたって、すべり台とトンネルを特注して作っていただきました。一本の木をくりぬいて作られています。有馬さんはスキをもっとみんなから愛されるようにしたいとおっしゃっています。有馬さんとの出会いがあつてこの部屋のコンセプトが具現化しました。ベンチやテーブルは宮崎県産の飫肥スキです。この部屋のオブジェには、この他に九州各地のスキが使われています。

このミニスキコダマは300個あります。有馬さんに作り方を教わってボランティアさんたちの手で、一昨年の夏、7回ワークショップを開催して作ったものです。最初、慣れない手つきで切り出しナイフを使っていた私を見たボランティアのお父さんの一人が、そんな手つきでは見られないといつて有馬さんに教わりに行ったことがきっかけでした。そんな経過でみんなで作ったこの部屋は、みんなの思いいれもひとしおで、その後のメンテナンスもみんなの手で担われるようになりました。「イクジイ」たちのボランティアが生ま

れたことで赤ちゃんを連れてお父さんたちもここに遊びに来るようになり、運営にも携わってくれることになりました。このことは子育て支援という見方からとても有効だったと思います。

東京おもちゃ美術館の「ウッドスタートプロジェクト」

東京おもちゃ美術館は常設展示館ですが、この他に「おもちゃの広場」を各地の子育てサロンに、グッドトイを貸し出し、全国180箇所でおもちゃコンサルタントが開催しています。また「グッドトイキャラバン」「木育キャラバン」など移動型おもちゃ美術館も事業として展開しています。そして、今最も力を入れているのが「ウッドスタートプロジェクト」です。これは、

●ファーストトイは地産地消の木のおもちゃを！
●赤ちゃんが気持ちよくハイハイできる内装木質化の子育てサロンをつくらう！

という二つのメッセージを、自治体や企業とのコラボレーションで進めていく運動です。

一昨年から、新宿区と長野県伊那市の木工職人さんが手を組んで、赤ちゃんの誕生祝い品として木のおもちゃを配布しています。現在、岐阜県美濃市、沖縄県国頭村など全国7箇所の自治体でもコラボレーションがスタートしています。

企業とのコラボレーションも進んでいます。無印良品有楽町店の子ども売り場に木育広場を製作しました。全国10店舗に拡大中です。スーパのサミット(株)は社会貢献として山梨県北都留郡に「サミットの森」の整備支援をしています。この森から出た材で制作した赤ちゃん向けの木のおもちゃ「木育おもちゃセット」を子育て支援施設に寄贈しています。

赤ちゃんからの生涯木育が、全国でスタートし始めています。

毎年1回、全国のおもちゃコンサルタント・木工職人が、ここに大集結して「東京おもちゃまつり」を開催しています。東京おもちゃ美術館の大祭です。今年は10月19・20日に開催されます。

【取材を終えて】

東京おもちゃ美術館を訪れて、印象に残ったことの一つは、子連れのお母さんたちの表情がとても素敵なことでした。子どもはもちろんおもちゃに夢中ですが、それを見てお母さんたちも嬉しい笑顔をされていました。そこにはおじいちゃん、おばあちゃんも、お父さんもいました。人と人を繋ぐものとしておもちゃを考えたという、石井さんのお話をあらためて思い出しました。

NPO団体による運営ということだけでなく、おもちゃ美術館はたくさんの人の善意と創意で支えられています。それも、おもちゃというテーマのなせる技なのかもしれません。

おもちゃは木製とばかりは限りません。でも、「木のおもちゃ」には時代や世代を越えた力があ



●●●●● 東京おもちゃ美術館 ●●●●●

URL: <http://www.goodtoy.org/ttm/index.html>

所在地: 〒160-0004

アクセス: 東京都新宿区四谷4-20 四谷ひろば内
より お子さま連れで徒歩7分

開館時間: 10:00 ~ 16:00 (入場は15:30まで)

※「赤ちゃん木育ひろば」のみ15:30まで

休館日: 木曜日 / 特別休館日

2013/9/9(月) ~ 13(金) / 年末年始

※木曜日が国民の休日の場合は開館

入館料: こども 500円

おとな 700円 (中学生以上)

※2歳以下は無料



笑顔を絶やさない石井さん、山田さんのお話はいつも魅力的です

るようです。その魅力はどこにあるのか。答えはいくつも出てきそうですが、簡単ではありません。人類が生まれたときから、そのそばにあった生物、木。人にとってそれはとても懐かしいもののかもしれません。そして「木育」とはそもそも「木」の知識を増やしたり普及したりすることだけではないようです。石井さんは、「木」のご縁で木材・合板博物館さんとも何か一緒にすることが出来たらいいですね、とおっしゃって下さいました。

あなたも東京おもちゃ美術館を訪れてみてはいかがでしょう。さあ、木育のスタートです。(博物館スタッフ 長谷川麻紀)



【SYNQA】
「イトーキと Synchronaize (同調)して進化(シンカ)していく」という意味を込められている

材の良さが活かされた製品でなければ——
イトーキの Econif a (エコニファ) シリーズは、家具には不向きとされる針葉樹を弊社独自の技術で、よ

り洗練されたデザイン耐久消費財として実用化させ、これをオフィスに供給しようとするものです。オフィスの木質化の追求は、都市での木材利用によるCO₂固定量を増やすことに貢献し、併せて国産資源活用によって森林機能をより促進させるエコソリューションです。

地域材のブランド化に貢献する事業として
2010年に公共建築物等木材利用促進法が成立しました。これは戸建ての住宅需要だけでなく、幅広く木材利用の可能性を拓けるものです。

外光もいっばいに取り込んだ、開放的な空間の1階ネットワークカフェ。このカフェを含めて1階フロア全体がFSC森林認証・全体認証を取得しています。日本では7件目の快挙

海外のオフィスには日本以上に木質製品が多い。木質化は、快適なオフィス空間であることの欠かせないバリエーションの一つです。

Econif a (エコニファ) は Eco と Conifer (針葉樹の意) からの造語です。「人も生き生き、地球も生き生き」の基本理念から、地域材の調達から加工、内装材・家具製作まで幅広い活動に取り組むことで、自然と人が健やかに共生する低炭素社会をめざします。

都心のオフィスで極限まで木質化する
SYNQAは、木質化することによって、どれだけ快適なオフィス空間を実現できるか、という挑戦でもあります。都市では建築物を木質化することは容易ではありません。大規模建築物を木質化する試みも本格化しつつあります。が、建築基準法や消防法などクリアし

なければならぬ問題はまだまだ多い。オフィスの多くはRC造の高層建築物の中にあります。オフィスの集中するテナントビルの中にどれだけ木質を持ち込めるか、と言って例えば六本木ヒルズにログハウスを持ち込むような発想はあまりにナンセンスです。SYNQAには、イトーキが現在持っている木質利用のリテラシーの粋を集めました。1〜3階あわせて延床面積3400㎡、ここに全体で55㎡の日本各地の国産材が活用されています。では、内部を見ていただきましたでしょうか。



ソリューション開発統括部 Econif a開発推進部の末宗浩一室長。イトーキの木質製品開発について分かりやすく教えていただきました。

販促プロモーション企画推進部 カスタマーリレーション戦略企画部の町田年英室長

Ecoソリューション企画推進部 Econifa開発推進部の田淵陽子氏

都心のオフィスを「木」で満たすという試み

——木質感がいっぱいの空間という印象です。ビジネスの新しいあり方を提案するオフィス空間

当初のコンセプトは木質化が主目的ではありませんでした。

今は多様な価値観が交差する時代です。ビジネススタイルも従来型ではない、新しいあり方や働き方が求められています。企業枠にとどまらない人と情報の流れ、新しい知の協業の場が必要と考えました。その提案がSYNQAです。ここはショールームの要素も兼ねていますが、何よりビジネスの実践空間です。企業枠を超えたプロジェクトの場であり、さまざまなブレイクスルーを可能にするアイディアを具体化する場であり、同時にコミュニティ空間でもあることをめざしてデザインされました。

エコニファは、ポリシーのあり方だけににとどまらず、製品そのものの品質が喜ばれるレベルをめざします。真の快適さ「Ud (ユニバーサルデザイン)」と、地球環境の保全「Eco Design (エコデザイン)」とを融合させたコンセプトです。スギ、ヒノキ、カラマツなど地域材の特色を活かし、材の良さが製品価値に活かされた製品を開発する。ポリシーだけでなく、製品の良さがユーザーに求められるようにしたい。製品そのものの価値が評価され通用しないことには、木材流通は確かなものにならない。

都心のオフィスで極限まで木質化する
SYNQAは、木質化することによって、どれだけ快適なオフィス空間を実現できるか、という挑戦でもあります。都市では建築物を木質化することは容易ではありません。大規模建築物を木質化する試みも本格化しつつあります。が、建築基準法や消防法などクリアし

都心に出現した新しい交流型のビジネス空間



「木の最前線レポート」は、新しい「木」の時代を創出しようとする意欲的な挑戦をひろく紹介するコーナーです。今回は、中央区京橋3丁目に建つ「相互館110タワー」1〜3階にある、イトーキ東京イノベーションセンターSYNQA(シンカ)をお訪ねしました。株式会社イトーキは明治23年(1890年)創業の、歴史を誇るオフィス機器メーカーの老舗です。そのイトーキさんが昨年11月、都心に斬新なビジネス空間を誕生させました。今までにない「木」の空間が出現したと話題を呼んでいます。SYNQAとはどんな空間なのか? そのコンセプトは? どんな「木」の使われ方なのか?

株式会社イトーキのソリューション開発統括部Ecoソリューション企画推進部Econif a開発推進室の末宗浩一室長に、この新しいビジネス空間について教えていただきました。



イトーキ東京イノベーションセンター

《SYNQA》の提案



外光もいっばいに取り込んだ、開放的な空間の1階ネットワークカフェ。このカフェを含めて1階フロア全体がFSC森林認証・全体認証を取得しています。日本では7件目の快挙



※ FSCプロジェクト認証

FSCプロジェクト認証は、FSCが定めるFSC森林認証制度のうち「建造物」や「製造物」などをプロジェクト案件ごとに認証する仕組み。この認証には「全体認証」と「部分認証」があり、対象範囲内のすべての木質由来の素材がFSCの規格に沿った管理と認められた案件が全体認証で、より取得が難しいとされている。SYNQA1階フロアのFSCプロジェクト認証・全体認証は、世界で46件目、日本国内では7件目（2012年8月現在）、RC建築物のオフィスとしては日本初となる。

「木」を実感するスペース

1階、WORK CAFEは、利用者や初めての方をお迎えする、「開放的な情報の流入空間」をコンセプトにしています。ギャラリ、サテライトオフィス、ネットワーキングカフェ、キュレーションステージ、ライブラリーがあります。

【ネットワーキングカフェ】カバ無垢材のフロリングを敷いた大規模木質空間です。床だけでなく壁、天井、下地材など見えない箇所にも地域材を活用し、柔らかな木質感に囲まれながら、利用者同士が気兼ねなく集えるコミュニケーションスペースをめざしました。用途に応じた自在なレイアウトでご利用いただけます。

【サテライトオフィス】床はもちろん、カウンター、飾り棚、柱巻き、天井に至るまで地域材を活用しています。黒の飾り棚はカラマツを使い、フロアスペースには針葉樹材のラウンジチェア「ツイモ」を配置し、落ち着いた空間を演出しています。プリンターなどのツールがご利用できます。隣接したカフェではドリンクも販売しています。

【ライブラリー】電子書籍と出版書籍を一緒に利用できる書架で、タッチ式のモニターから検索ができ、タブレットの貸し出しもしています。ここで活

カスマーレレション戦略企画室の町田年英室長、Econifa開発推進室の田淵陽子さんのお二人に、SYNQAの各フロアを案内していただきました。

動するプロジェクトや個人の知識、情報を「見える化」するスペースです。この1階スペースは、「FSCプロジェクト認証・全体認証」※を取得しています。

2階、TEAM LABはプロジェクトルーム、プロジェクトブースからなる、プレゼンテーションやプロジェクトセミナーに使うフロアです。ブースの二にEconifa仕様のコア&セルのフレームや基本パーツを組み合わせて使う「アグラム」の床ユニットを置いています。

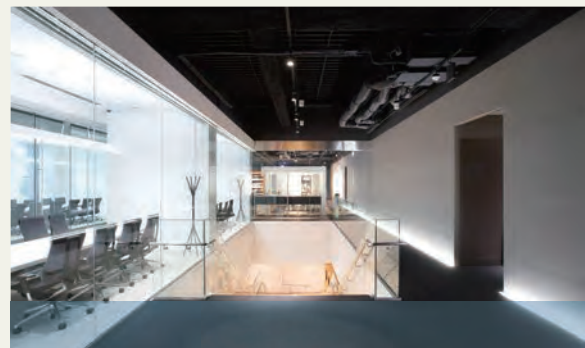
3階フロア、SYNCOFFICEは、イトーキのオフィスです。ここは社員自ら、SYNQAで得られた知見や、開発ソースをマッチングして新しいソリューションを生み出す実証実験の場です。フロア全体をぐるりと通る「スギの回廊」もその一つです。内装木材の使い方の通念として、スギは床材には不適とされていますが、ここではあえて廊下の床材として使用しました。

活動する人間を包む 素材に革命を

これも実証実験の一つです。たしかに、これまでの内装木材の使い方にスギを廊下に使うことは不適とされてきましたが、果してそうでしょうか？使うほどに、靴跡やヒールの跡がつい

——本室長にお聞きしました。廊下の床材にあえてスギ材を使った意図について教えてください。

活動する人間を包む素材に革命を



イトーキ東京イノベーションセンター SYNQA

所在地：東京都中央区京橋3-7-1 相互館110タワー1F～3F
〒104-0031

面積：延床面積 3,392㎡

仕様：相互館110タワースペック／S造(柱CFT)、RC造、免震構造
・免震構造によるSランク（最高グレード）の耐震性能
・CASBEEによるAランク相当の環境性能

(入居面積)

1階 外部交流スペース サテライトオフィスカフェ、ブランディングギャラリーなど (584㎡)

2階 共創型事業スペース セミナールーム、プロジェクトルーム、シアターなど (1,389㎡)

3階 オフィス イトーキ京橋オフィス (1,419㎡)

床面が凹凸状に変化してきましたが、社員の評判は悪くはありません。「木」の柔らかさを足下に感じながら歩くことは不快でしょうか。目で見てもしろ楽しくはありませんか？

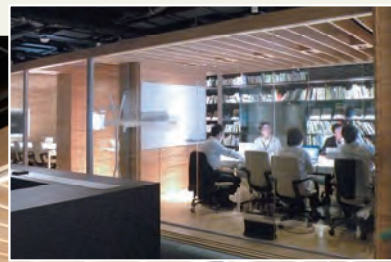
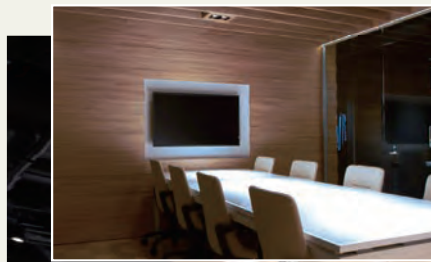
木材は表面に節が見えます。衝撃を与えるとへこみます。しかし、それが木材を内装材に使うときの疎外要因でしょうか。建築材や内装材にこれまで求められてきた品質は、寸法が狂わない、傷つきにくい、経年変化しにくいといった要素でした。木材を使うことは木材の良さを認め、その性質を活かすことにあります。経年変化も木材の妙味ではないでしょうか。SYNQAには全国各地の地域材が使用されています。地方の林業関係者の方は、頻繁にここを訪れて、その経年変化もチェ

ックしていかれます。

活動する人間を包む素材に革命をもたらしたい。SYNQAが、ここをイノベーションセンターと自称するのは、これまでにない発想と価値観を生み出し、ここを常に新しい情報技術の発信地にしたいからです。



田淵さんにサルタスを紹介していただきました。ヒノキの集成材を使い、木が林立しているような雰囲気空間。スペースの大きさに合わせて自在な組み立てが可能



2階プロジェクトブースの一角。Econifa仕様のコア&セルのフレームや基本モジュールとなるパーツと組み合わされる「アグラム」の床ユニット。重厚な木質感に圧倒されます



1階フロアのライブラリー。書架にある本だけでなく、電子書籍の検索、ダウンロードも可能。タブレットの貸付もあり



3階、イトーキのオフィス。フロア全体を取り巻くように設けられた「スギの回廊」。靴跡による凹凸が足裏に不思議な感触です。歩きやすさと木と同居している感じがたまりません



2階フロアの真ん中に設けられたくつろぎとコミュニケーションのスペース。



2階TEAM LABのフロアは、開放感と機密性とが絶妙に共存するスペース。プレゼンテーション、セミナー等、多用途性に富む空間です



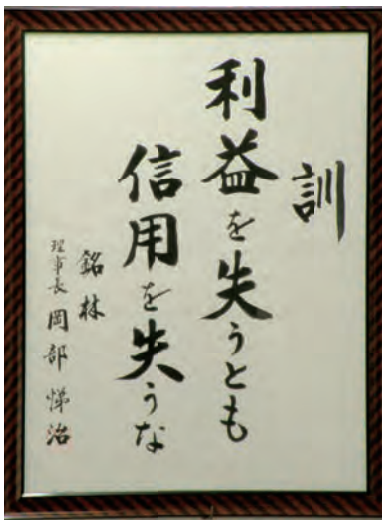
新木場 漫歩



株式会社 銘林

「木のまち 新木場」とその周辺エリアで気になる会社、企業、人物、スポットを紹介する新木場漫歩のコーナー。今回は新木場1丁目、木材・合板博物館のある新木場タワービルの隣にある「株式会社 銘林」さんをお訪ねしました。株式会社銘林さんの前身「協業組合 銘林」は昭和47年創業、昭和48年には新木場移転第一号組の企業として、新木場の歴史の一端を担ってきた老舗企業です。

代表取締役の森山文男氏、総務部の川畑公二氏のお二人にお話を伺いました。



「利益を失うとも信用を失うな」創業以来の社訓

銘木専門商社から総合木材商社へ

思いきった業態進化で、新しい木材流通のビジョンを探る



玄関前で、森山社長、川畑氏のお二人を撮らせていただきました

— 深川木場から新木場への移転第一号と伺っています

銘木の林、銘林の誕生

移転に先立つ昭和47年に、それぞれに歴史を持つ銘木業者10社が連合して「協業組合 銘林」を設立し、昭和48年に新木場に事務所を移転して営業を開始しました。東京都から無利子融資付の移転条件が提示され、それは格好の条件でした。当時は、高度経済成長が始まったばかりの頃で新卒の若い人は「金の卵」と呼ばれた時代です。一軒一軒、少人数の家族経営の銘木屋に、「金の卵」はそう簡単に来てはくれません。大きな組織に改変して近代経営化を図る必要に迫られていました。銘木の林、銘林

の誕生です。

移転当初は、まだ新木場のインフラも整備中でした。道路は出来ていましたが、鉄道はまだ通っていない頃です。バス路線もないので、東陽町からマイクロバスで社員を送迎していました。鉄道の開通はデイズニールランドが出来た頃だったと思います。駅がどこにできるかも未定でした。広い新木場のどこに居場所を定めるか、好きなどころに位置を占めて下さいということ、今の新木場1丁目に社屋を竣工しました。その後、続々と木場から新木場に移転が続いて、あつという間に新木場が「木のまち」に変貌し、最盛期は660社ほどが新木場で営業していました。高度成長期の需要増で、安い

外材輸入が盛んになり、当時の貯木場は一杯でした。製材業者さんも多くがここに工場を構えていました。今はほとんど姿を消してしまいましたが…。

— 東日本一帯に営業拠点を伸ばしていらつやいます

創業当初は、東京と千葉だけでしたが、その年のうちに仙台と水戸に営業所を開設し、翌昭和49年に静岡県清水、50年に新潟、札幌、秋田に営業所を設けました。当時の需要に追いつくためには東京から

だけではとても対応しきれない。機動力が問われていました。材木流通は、地方によって求めるものに違いがあり特色もあります。地域に密着して対応するためには、営業拠点を拡大することが急務でした。銘林は、一貫して地域密着型の営業展開をこころがけてきましたし、今もそれを目指しています。平成12年に「中小企業団体の組織に関する法律」の改正があり、これに伴って協業組合から株式会社銘林に組織変更し、現在14の営業所を展開しています。

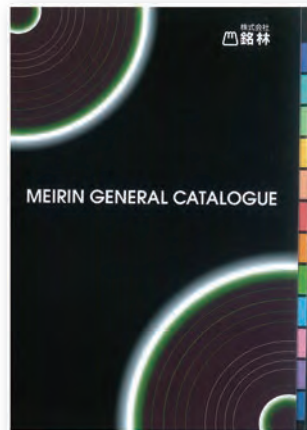
ですから在庫数はむしろ地方の営業拠



森山文男代表取締役。とてもざっくばらんなお話ぶりの社長です



総務部の川畑公二氏



アイテムの豊富さで300頁を越す大部の銘林総合カタログ。全ての製品に付された歩掛単価、設計単価などのデータは社員全員の力になった労作



点に厚い配置を行っています。在庫の種類も地方の需要に対応した内容にしています。地方に比べれば、東京は和室造作材の需要は少ないので、銘木の在庫も地方拠点の方が多いですね。

— 伝統的な銘木屋さんのイメージとは少し違うような…

時代への新しい対応——需要にマッチした営業力、機動力のあり方

銘林は、そういう意味では今までの伝統的な銘木屋ではないでしょうね（笑）。老舗といわれた大手の銘木屋さんが姿を消していくなかで、時代への新しい対応が求められています。古い銘木屋の商いでは、在庫の管理も無頓着なところがありました。月商の2倍、3倍の在庫を抱えていても、結果売ればいいという感覚が昔はあったと思います。自己資金の枠の中でやりくり出来る範囲でしたら、それでもいいでしょうが、多数の社員を抱え、融資を受けて経営する以上はそうはいかないんです。銘林には現在100名強の社員がいます。製品化工場を自社

内にもついていた頃は、社員は200人以上いました。製造部門を抱えるには難しさが伴います。現在、自社工場はなくし、和風の造作材や特注ものの製品化工程はアウトソースする形をとっています。既製品は資本参加の形で岐阜県恵那に工場をもっています。自社工場ですと、小規模経営のコスト安に太刀打ちできません。きちんとコストも在庫も管理する。その上で、需要にマッチしたきめ細かな営業を行う。ハウスメーカーさんは材料を自分のところで抱えるとコスト高になってしまふ。我々は、必要なものを機敏に現場に運ぶ、という流通の機動力でそれを支えます。銘林はお客様から図面をもらい、これに沿った歩掛計算をして見積りを作り、注文をもらいます。ここまでする営業できる場所は多くはないと思いますよ。

銘林は平成15年から総合カタログを作

って、ほぼ毎年、内容を更新して頒布しています。床の間材に始まり、フローリングから商業空間、ウッドデッキに至るまで12分野の各種部材を掲載した300頁を越す大型カタログです、全ての製品に寸法、種類に応じた歩掛単価、設計価格を記載し、工務店さんも施主さんにカタログを使って説明してもらえように配慮した構成のカタログです。銘林の社員が総出でこのデータづくりをしています。これは営業力の基礎体力づくりでもあります。

旧来の経営手法から脱皮することが今の木材流通には求められています。

— 林野庁の後押しで国産材利用の促進が進められています

木材需要の新しいビジョンを模索

林野庁がやっと重い腰をあげて、公共建築物等木材利用促進法を施行しました

が、歓迎すべきことには違いありませんが、私に言わせてもらえば、あれは遅すぎるのではないかと。日本の林業に対して行政はもっとスピーディーに手を打つべきだったと思います。日本の木材需要は高度経済成長期を通じて、安い外材を使うようになりました。農産物については保護関税を課して自由化の波からガードし続けてきたのに、林業に関しては木材輸入へのガードは緩すぎたと思いますね。結果、日本の山林は担い手を失って、荒れ放題となりました。今、林道整備などに着手していますが、もっと早くにすべきことでした。

今、ハウスメーカーの勢いが伸びています。住宅需要が大きくなることは歓迎ですが、そんななかで、地場の工務店さんが衰退しています。そこを何とか手助けできることはないかと、模索中です。ハウスメーカーさん任せでは、限りなく木材を使わない方向に進んでいく可能性も考えられます。ハウスメーカーさん私も私にもとって材をお納する大切なお客様ですが、今の若い施主さんは、モデルハウスを見て家の購入を計画します。そこにもっと木材活用をした住宅のあり方を提案していきたい。工務店さんに材木屋との提携をお奨めするとか、地場の関係者を集めた講習会を行うとか、私どもも提案型の営業力を養い、工務店さんにも施主さんに提案できるような仕組みを作りたいと思っています。

若い設計士さんは木についての知識、情報が乏しいので、ここにどうやって情報提供できるか。私どもには、どこにどのような材を使えばいいかというアドバ

イスは出来ませんが、どんな木の使い方が好ましいかを提案する発想力が足りません。ここに若い人のアイデアの力を借りたいですね。

銘木に限らず今、木材流通は構造不況業種です。銘木の良さを伝えることはこれからも続けていきますけど、銘木にはこだわりません。それよりも木材流通のパイプをもっと太くしていくことに企業の使命を感じています。商品アイテムをもっと多様なものにし、木材利用の可能性を拡げることが必要です。そのためには銘木屋らしからぬと思われるような業態変化も何ら厭いません。今年JKホールディングスのグループに入りました。今度のJKフェアには銘木は出展しません。新しいアイテムを準備中です。旧来の、まだまだ売れるという生き残りの仕方ではなく、売る方法をアグレッシブに追求していく、木材需要の新しいかたちをつくることこそが私たちの課題です。

経営方針

1. 株式会社銘林は、より良い製品とサービスを提供する事に努力し、需要者の大いなる満足を得る事を念願する。
2. 株式会社銘林は、徹底的に能力主義をとり、各人の能力を最大限に発揮し、高能率・高賃金を実現する。
3. 株式会社銘林は、積極主義をとり、独創と努力で『銘林ブランド』を確立し、業界をリードする。
4. 株式会社銘林は、経営を内部公開し、社員に利益の配分を行い、社員に希望と信頼の持てる会社とする。
5. 株式会社銘林は、役員も社員も共に自分の責任と義務を果たす事に努力し、上意下達を徹底し、協調の精神に徹底する事により、会社を明るい働き易い職場とする。

各部署のオフィスに張り出されている経営方針。毎朝、朝礼時に社員全員で唱和します



銘林オフィス。

受付で。お二人とも恥ずかしがってなかなかカメラを向いてもらえません。そのうちの貴重な一瞬

【後記】

株式会社銘林さんは、木材・合板博物館のすぐ隣にあります。取材に伺うまで、その名から想像するとおりの伝統的な銘木屋さんのイメージを抱いていました。森山代表取締役は、古い木材流通の体質を脱ぎ捨て、新しい木材需要を造り出していくことが、今は求められている。そのためには「銘木は守り続けるが、銘木にはこだわらない」「銘木屋らしからぬ」業態変化にも積極的にチャレンジしていく。国産材利用の促進を後押しする法律が出来たが、それはほんの少しの追い風にすぎない。構造不況業種である木材流通をつくりかえるのは、材木屋自身の仕事だと言いつつ切ります。新しい木の時代の息吹は、それを先取りする人たちのところから吹き始めているように思いました。

(博物館スタッフ 長谷川麻紀)



木材会館大ホールを会場に くらしと森林・木材の放射能をめぐるテーマで 公開シンポジウムを開催

7月18日(木)、新木場駅前の木材会館6階大ホールを会場に、(独)森林総合研究所主催による公開シンポジウム「私たちのくらしと森林・木材の放射能―森林総研が解き明かすその実態と今後」が開催され、7つの講演(研究発表)とパネルディスカッションが行われました。

このシンポジウムは、2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所の放射能事故以来、森林総研に寄せられた放射能汚染に関するさまざまな不安や質問に対し、研究所の調査結果をひろく紹介し、最新情報の共有、今後取り組むべき課題を議論する目的で開催されました。会場は事前申込者の約300人の出席者で一杯となりました。(以下、抄録で紹介。文責筆者)

森林総研の調査結果をばひろく紹介

講演のはじめは、高橋正通研究コーディネーターが原発事故後の調査研究のあらまし、各発表の要点紹介を行い、放射能汚染が森林の多面的な機能に深刻な影響

を及ぼし、事故の重大性と回復の必要性を訴え、以下に各氏の研究発表が続きました。立地環境研究領域長の金子真司氏からは、「放射性セシウムの蓄積と分布の変化を探る」と題して、原発から距離と汚染度の異なる福島県3箇所の調査結果の報告。水土保全研究領域長の坪山良夫氏は、「森林渓流水の放射性セシウムのモニタリングする」と題して、県内6箇所の森林からの渓流水の調査結果から全測定日の3%程度しか検出限界の1Bq/lを超えなかったことを報告。森林昆虫研究領域主任研究員の長谷川元洋氏は、「森林にすむ生物内の放射性物質」と題し、「ミミズとネズミの体内セシウム濃度の説明があり、落ち葉を餌とするミミズのセシウム濃度は餌の影響を受けやすいことを報告。木材特性研究領域長の高野勉氏からは、「木材中の放射性セシウムの動きを追う」と題し、樹木の樹皮、辺材、心材の比較で樹皮が最も高く、材の内部はきわめて低濃度で、木材を使った部屋で暮らす場合の追加被曝は小さいという計算結果が報告されました。

福島県木材業界による自主検査

パネルディスカッションは、講演を受け、会場からの質問に答える形で行われました。このなかでパネラーの一人、福島県木材協同組合連合会専務理事の宗形芳明氏は、福島県の木材業界は、製材品を安心して使っていただくため、各工場で出荷時に放射線量を独自に自主検査を行い、出荷を判断する目安として、1000cpm(カウント・パー・ミニッツ)※を自主管理基準としていることを報告。全ての測定結果は記録し保管しているのでも、いつでも請求できることや、測定方法についても説明し、今後自主検査基準は必要に応じ見直しを行うことなどを付け加え、同県産材の安全性を訴えました。

注※ cpm(カウント・パー・ミニッツ)とは、放射線測定器に1分間に入ってきた放射線の数を示す単位。



パネラーに講演者も加わったで行われたパネルディスカッション



出席者で埋め尽くされた会場



福島県の木材業界による製材品の自主検査について報告する、福島県木材協同組合連合会専務理事の宗形芳明氏

赤ちゃんからお年寄りまで 一緒に遊べるビッグで楽しい おもちゃ箱



おもちゃ箱の中は「木」がいっぱい！
木育のスタートするひろば

——ここは、小学校の校舎ですよね

昭和モダンの面影を残す校舎

旧四谷第四小学校の校舎は昭和11年（1936年）竣工で、関東大震災の教訓から防災に強い校舎として設計されました。片側廊下、片側教室という造りは、全員が5分以内に校舎外に避難できることを考えた仕様で、その後の学校建築の基本形となりました。当時は復興小学校と呼ばれていたそうです。この玄関ビロティにある3本の太い柱など、70数年前とは思えないモダンな造りが地域から愛されて、廃校になる前から歴史的建造物として遺したいと、地域の人たちが区にはたきかけていました。今ここは、地域住民ボランティアなどを中心にした「地域ひろば」、NPO CCAAアートプラザ（市民の芸術活動推進委員会）、東京おもちゃ美術館の3団体で協同活用、

運営をしています。全国でも珍しい廃校活用の仕方です。東京おもちゃ館は校舎内の11の教室を利用しています。

——階段をのぼった階が受付。館名のプレートに並んで名前が記された積み木が壁一杯に嵌め込まれています。タレントさんの名前もみえます。

一口1万円、「一口館長」という寄付を呼びかけて最初の改築費用を賄いました。これは寄付して下さった一口館長さんたちの名前です。私たちはNPO団体なので寄付金とボランティアで運営されています。館内の赤いエプロンのスタッフは、みなさん「おもちゃ学芸員」と呼んでいるボランティアさんで現在220名余の方が登録されています。今日も14、15人の方がスタッフとして来てくださっています。この力なしに私たちの活動は1日たりともなりたちません。

「おもちゃ」とは何でしょうか？一言では答えきれそうもない難問ですが、とにかくそれは遊ぶもの、楽しいものには違いありません。

新宿区四谷四丁目に、認定NPO法人日本グッド・Toy委員会が運営する「東京おもちゃ美術館」があります。同委員会は良質なおもちゃを「グッドToy」に選定する事業を行っています。その収蔵品数は約15万点、そのうち5,000点のおもちゃが常時展示されています。美術館とはいいながら見るだけでなく、実際に触って、遊べて、作って、学べるミュージアムです。2008年4月に中野区から移転、再開しました。建物は、旧新宿区立四谷第四小学校の校舎が利用されています。

夏休みが始まったばかりの7月、東京おもちゃ美術館を訪ねました。赤ちゃん木育事業部の石井今日子さんが、館内を案内して下さいました。



- ①ピロティ
- ②一口館長の積み木
- ③一口館長について説明する石井さん
- ④日本産のグッド・Toyを展示販売するミュージアムショップ
- ⑤子供たちはそれぞれの遊びに夢中
- ⑥「グッド・Toy2013」[林野庁長官賞]に輝いた「森のどうぶつみき」
- ⑦グッド・Toy2013を展示しているグッドToyの部屋



ミュージアムショップ 日本のおもちゃで遊んでもらいたい

かつては個人経営のおもちゃ専門店があったのですが、今は「まちのおもちゃ屋」さんを見かけることが少なくなりました。みなさんがおもちゃを求める店は、外国資本の大型量販店や家電量販店のゲームソフトのコーナーなどではないかと思っています。そのおよそ9割は外国製品。アメリカ、中国、東南アジア製…。あとは趣味のいいママたちがヨーロッパ製を求めるとか。ここでは（写真④）、日本で作られたおもちゃを中心に展示販売しています。少子化のなかでせっかく日本に生まれた大切な子たちが、日本のおもちゃを知らないで育つのはあまりに残念です。もっと日本のおもちゃで遊んで育ってもらいたいというこだわりがあります。

グッド・Toy展示室 いいおもちゃのキーワード、 「コミュニケーション」

このグッド・Toyの部屋（写真⑦）は、日本グッド・Toy委員会が選定した良質のおもちゃを展示しており、今年の「グッド・Toy2013」も展示しています。ところでグッド・Toyを直訳すると「いいおもちゃ」ですが、いいおもちゃの基準は何だと思いいになりますか？人それぞれの答えがあつて、一言では括りきれない難問ですよね。

私たちは、あえてその基準を「コミュニケーション」というキーワードに求めています。初めて出合った人同士、違う世代の人同士、外国人同士、障害を持つ人と健常者の人同士。仲良しになれる、話が弾む。そんな人と人を繋げるモノとして、おもちゃを捉えてみたいと考えています。

これは今年選定されたグッド・Toyのコーナーです。この「森のどうぶつみき」（写真⑥、本誌表紙写真）は、「グッド・Toy2013」とならん

で「林野庁長官賞」を受賞したおもちゃです。岐阜県のオークヴィレッジというメーカーさんが作った積み木です。樹種は日本産の5種が使われ樹種名も刻まれています。香りや色、手触りを感じることができます。どうぶつたちはそれぞれがいや親子になっていて、積み木だけでなく、動物園を作る遊びもできます。

日本グッド・Toy委員会は、人材育成講座として「おもちゃコンサルタント」養成講座を事業の一つとして開講してきました。そこで生まれたおもちゃコンサルタントが全国に5千人います。その方々はそれぞれ保育園や、介護の現場、病院などのフィールドで活躍されていますが、その人たちが自身のフィールドで役にたったり、いいと思えたものを、グッド・Toyとして推薦し、それを全国での投票や体験会を経て、その年のグッド・Toyが選定される仕組みになっています。どちらかというと、「本屋大賞」と似た選考プロセスですね。



館内を見て回った後、法人運営部部長の山田心さん（右）、赤ちゃん木育事業部の石井今日子さん（左）のお二人に、日本グッド・Toy委員会、東京おもちゃ美術館の事業、ウッドスタートプロジェクトについてお話を伺いました

東京おもちゃ美術館
TOKYO TOY MUSEUM



美術館正門前(上)美術館入口(下)

- ①廊下の展示
- ②親子で学ぶおもちゃこうぼう
- ③赤いエプロンのおもちゃ学芸員のお姉さんが教えてくれます
- ④ゲームの部屋
- ⑤速さと判断力が問われるサッカーゲーム
- ⑥ここではおもちゃ学芸員さんが遊び方を教えてくれる。リタイヤしたお父さん、おじいさんも活躍する場



要は、現在は国内では減少傾向で、いろいろなモノを作って再起をかけて頑張つてらっしゃいます。このおもちゃは実際にそろばん工場の工程の一つで、私どもの館長が遊びのようで面白と言ったことがきっかけとなって製作されることになったおもちゃです。

この教室を美術館に改修するにあたって、耐震性の問題から校舎の梁や柱に手を加えるのはかなわなかったで、小屋の造物物を教室の中に作ることにしました。青森県の大工さん、建具屋さん、漆職人さんなど職人さんたちが集まって、みんなでおもちゃを作ろうと「わらはんど」というグループを立ち上げました。これらの小屋はわらはんどさんが作ってくれたものです。わらはんどは青森の言葉で子どもの意、ハンドに手という意味も込めています。

おもちゃ(こ)ぼう

おもちゃ学芸員は、それぞれに得意の分野をお持ちです。自然物からいろんなものを作ったり、木工でガラガラを作ったり、手品を作ったり…この工房(写真②)は、その作り方を皆さんに教える教室です。親子でおもちゃづくりを楽しんでいただけます。今日のテーマは風ぐるまの作り方です。

ゲームの部屋

こころの成長を支える、人とおもちゃ

いま、小学生の子が遊ぶおもちゃが少ないように思います。圧倒的なのはテレビゲームやタブレットを介したデジタルゲームソフトが主流で、それはコミュニケーションの要素に乏しい。そんな中で、ボードゲームが見直されてきています。私たちが子どもの頃には、野球盤ゲームやボーリングゲームなど、一世を風靡するボードゲームが流行したものです。



このゲームの部屋(写真④)にはさまざまなボードゲームを置いています。おもちゃ学芸員は作り方も教えますが、遊び方も教えます。囲碁、将棋に始まってバックギャモン、オセロとか、この館ではその道のプロの人が教えにきてくれますので(写真⑥)、ときどきとても強い小学生も誕生していますよ。

このサッカーゲーム(写真⑤)は、テーブルサッカー協会日本女子代表選手のOLさんでもある方が毎月教えにきてくれています。めちゃくちゃ強いですよ、目にも見えないぐらいの速さでボールを動かします。そんな人に教えてもらおうと子どもたちも夢中です。オセロのチャンピオンの学芸員さんもいますし、囲碁、将棋の女流棋士の方も教えにきます。すでに仕事を引退された学芸員の方も活躍いただいています。

ゲームは勝ったり負けたり遊びです。今日は負けても明日は勝てるかもしれない。今の子はそういう遊びに尻込みする子もいます。小学校も高学年になると、囲碁や将棋など偶然性によらないものに挑戦できるようになり、勝敗の意味を自分で考えるようになります。負けて悔しいことも勝つてうれしいときも、そうした経験を積みながら成長してもらいたい。その道の学芸員さんたちはそうした経験をフォローできるプロの人たちでもあります。心が成長していく段階をここでは大切にしたいと思っています。



—今年のグッド・トイセレクションには木製のおもちゃが多いですね

おもちゃは木製品だけとは限りません。樹脂製もあれば、昔懐かしい布製もあります。私たちが木製のみを推しているわけではありません。でも、木のおもちゃに人気があるのはなぜでしょうか。これも難問ですね。一言では言い切れません(笑)。

企画展示室

健やかであれという祈り

郷土玩具・人形

こは、そのときどきの企画展示を行っている部屋で、今は郷土玩具、主に人形を展示しています。これらは、小泉正直さんという方の所蔵コレクション(写真①②)で、古い郷土玩具にもかかわらず、ひじょうに保存状態が良いので大変に美しい状態で鑑賞いただけますが、多くは80年以上前のもので現在は作られていないものがほとんどです。

このお人形の名前は「奉公(ほうこう)さん(写真③)」、香川県の高松張子(たかまつはりこ)です。高松張子には、鯛持ち戎(たいもちえびす)、獅子頭、張子虎など百種類ぐらゐありますが、「奉公さん」はその代表格です。「オマキという娘が奉公先の病氣のお嬢さんの身代わりとなって自分に病をうつして世を去った」という口伝があり、奉公さんは嫁入り人形、子どもの病氣を治す人形として重宝されました。乳児や幼児、子どもが病を得て早く亡くなるが多かった時代、子どもの健やかな成長は親の切実な願いであり、祈りでもありました。そんな愛しみの心が、人形の愛らしさを通して伝わってきます。

このお人形(写真④)はよくあるモチーフの一つ「饅頭食い」で、各地に伝わっています。両手に二つに割ったお饅頭を持っていますね。今でも、お子さんに「お父さんとお母さんのどっちが

好き？」などと聞かれた方が困ってしまう、意地の悪い質問をすることってありますよね、でもこの子はとても賢くて、二つに割ったお饅頭はどうしても美味しくて、どちらがどっちなんて言えませんが表現しています。七五三はそれまで子どもが無事に育ったことを祝うものだったとも言われますが、無事に育ってくれたら今度は賢い子に育ってもらいたいという、親のきりのない(笑)希望も表しています。人形笛には、子どもが食べ物に喉に詰まらせて死なないように、笛を吹くことで喉を鍛えてやりたい願いも込められています。

昔は、子ども一人ひとりに玩具を与えるような豊かさはありませんでした。年の何度かハレの日に、家族の願いを表すものとして買われていたんです。子どもの成長は家族の願いでもありました。子ども一人ひとりにそれぞれおもちゃが与えられる時代になったのは、ここ数十年の最近のことなんです。

おもちゃのもり

職人さんたちの創意が集まった部屋

最初は私たち「木のおもちゃ」に特別な思い入れがあったわけではありません。日本の「木のおもちゃ」文化も盛り上げたいという意図でした。ところが、ここがご覧のように子供たちに大人気の部屋になりました。「木の砂場(写真⑤)」は子供たちの一番のお気に入りです。ナラ、イチイなどの北海道産の広葉樹、針葉樹で作った2万個のボールが入っています。室内は九州産のヒノキを敷き詰めていますので、ここでは靴を脱いでお楽しみいただいています。(写真⑥)

この場所は、全国のおもちゃ職人さんとのネットワークがあり実現した部屋で、各地の地域材の魅力も感じて楽しんでいただける部屋になりました。これは兵庫県小野市が産地の播州そろばん作り体験遊具。(写真⑧)ご存じようにそろばんの需

- ①とんがったものはどこにもない、赤ちゃん木育ひろば。ここでは、お母さんたちもリラックス
- ②有馬晋平氏作のスキコダマのトンネル。赤ちゃんはここをくぐるのが大好き
- ③④ママと一緒に
- ⑤スキのベンチ
- ⑥積み木は樹種ごとに整理
- ⑦京都の北山杉でできた木のおもちゃ



※木育
「木育」とは、木と関わることで、木に対する親しみや理解を深めることにより木を生活に取り入れ、自ら森作りに貢献する人の育成を目指す活動です。(農林水産省広報誌aff 2012年10月号特集「木づかい」のススめより)

赤ちゃん木育ひろば スキの柔らかさに包まれる部屋

この部屋(写真①)をどんな材で作るのがいいか、あらかじめ大工さんや林業関係者の方にリサーチしたところ、皆さん、赤ちゃんだったらスキが柔らかくていいでしょうというご意見でした。そこでボランティアさんたちと一緒に多摩のスキ山に入って、そこで森林がいかに放置された状態にあるかも学ぶことから部屋作りをスタートさせました。この部屋は各地のスキ材を用いて作られています。壁と床には多摩認証材のスキを使っています。そのことで助成金をいただくこともできました。

スキ材と付き合い始めたことで、スキコダマというオブジェと出会うことになりました。これは大分県の造形作家、有馬晋平さんのオブジェ、スキコダマです。今回この部屋を作るにあたって、すべり台とトンネルを特注して作っていただきました。一本の木をくりぬいて作られています。有馬さんはスキをもつとみんなから愛されるようにしたいとおっしゃっています。有馬さんとの出会いがあつてこの部屋のコンセプトが具現化しました。ベンチやテーブルは宮崎県産の飢肥スキです。この部屋のオブジェには、この他に九州各地のスキが使われています。

このミニスキコダマは300個あります。有馬さんに作り方を教わってボランティアさんたちの手で、一昨年の夏、7回ワークショップを開催して作ったものです。最初、慣れない手つきで切り出しナイフを使っていた私を見たボランティアのお父さんの一人が、そんな手つきでは見られないといつて有馬さんに教わりに行ったことがきっかけでした。そんな経過でみんなで作ったこの部屋は、みんなの思いいれもひとしおで、その後のメンテナンスもみんなの手で担われるようになりました。「イクジイ」たちのボランティアが生ま

れたことで赤ちゃんを連れてお父さんたちもここに遊びに来るようになり、運営にも携わってくれることになりました。このことは子育て支援という見方からとても有効だったと思います。

東京おもちゃ美術館の 「ウッドスタートプロジェクト」

東京おもちゃ美術館は常設展示館ですが、この他に「おもちゃの広場」を各地の子育てサロンに、グッドトイを貸し出し、全国180箇所でおもちゃコンサルタントが開催しています。また「グッドトイキャラバン」「木育キャラバン」など移動型おもちゃ美術館も事業として展開しています。そして、今最も力を入れているのが「ウッドスタートプロジェクト」です。これは、

●ファーストトイは地産地消の木のおもちゃを！
●赤ちゃんが気持ちよくハイハイできる内装木質化の子育てサロンをつくらう！

という二つのメッセージを、自治体や企業とのコラボレーションで進めていく運動です。

一昨年から、新宿区と長野県伊那市の木工職人さんが手を組んで、赤ちゃんの誕生祝い品として木のおもちゃを配布しています。現在、岐阜県美濃市、沖縄県国頭村など全国7箇所の自治体でもコラボレーションがスタートしています。

企業とのコラボレーションも進んでいます。無印良品有楽町店の子ども売り場に木育広場を製作しました。全国10店舗に拡大中です。スーパのサミット(株)は社会貢献として山梨県北都留郡に「サミットの森」の整備支援をしています。この森から出た材で制作した赤ちゃん向けの木のおもちゃ「木育おもちゃセット」を子育て支援施設に寄贈しています。

赤ちゃんからの生涯木育が、全国でスタートし始めています。

毎年1回、全国のおもちゃコンサルタント・木工職人が、ここに大集結して「東京おもちゃまつり」を開催しています。東京おもちゃ美術館の大祭です。今年は10月19・20日に開催されます。

【取材を終えて】

東京おもちゃ美術館を訪れて、印象に残ったことの一つは、子連れのお母さんたちの表情がとても素敵なことでした。子どもはもちろんおもちゃに夢中ですが、それを見てお母さんたちも嬉しい笑顔をされていました。そこにはおじいちゃん、おばあちゃんも、お父さんもいました。人と人を繋ぐものとしておもちゃを考えたという、石井さんのお話をあらためて思い出しました。

NPO団体による運営ということだけでなく、おもちゃ美術館はたくさんの人の善意と創意で支えられています。それも、おもちゃというテーマのなせる技なのかもしれません。

おもちゃは木製とばかりは限りません。でも、「木のおもちゃ」には時代や世代を越えた力があ



●●●●● 東京おもちゃ美術館 ●●●●●

URL: <http://www.goodtoy.org/ttm/index.html>

所在地: 〒160-0004

アクセス: 東京都新宿区四谷4-20 四谷ひろば内
東京メトロ丸ノ内線「四谷三丁目駅」2番出口より お子さま連れて徒歩7分

開館時間: 10:00 ~ 16:00 (入場は15:30まで)

※「赤ちゃん木育ひろば」のみ15:30まで

休館日: 木曜日／特別休館日

2013/9/9(月) ~ 13(金) / 年末年始

※木曜日が国民の休日の場合は開館

入館料: こども 500円

おとな 700円 (中学生以上)

※2歳以下は無料



笑顔を絶やさない石井さん、山田さんのお話はいつも魅力的です

るようです。その魅力はどこにあるのか。答えはいくつも出てきそうですが、簡単ではありません。人類が生まれたときから、そのそばにあった生物、木。人にとってそれはとても懐かしいもののかもしれません。そして「木育」とはそもそも「木」の知識を増やしたり普及したりすることだけではないようです。石井さんは、「木」のご縁で木材・合板博物館さんとも何か一緒にすることが出来たらいいですね、とおっしゃって下さいました。

あなたも東京おもちゃ美術館を訪れてみてはいかがでしょうか。さあ、木育のスタートです。(博物館スタッフ 長谷川麻紀)



【SYNQA】
「イトーキと Synchronaize (同調)して進化(シンカ)していく」という意味を込められている

材の良さが活かされた製品でなければ——
イトーキの Econif a (エコニファ) シリーズは、家具には不向きとされる針葉樹を弊社独自の技術で、よ

海外のオフィスには日本以上に木質製品が多い。木質化は、快適なオフィス空間であることの欠かせないバリエーションの一つです。
Econif a (エコニファ) は Eco と Conifer (針葉樹の意) からの造語です。「人も生き生き、地球も生き生き」の基本理念から、地域材の調達から加工、内装材・家具製作まで幅広い活動に取り組むことで、自然と人が健やかに共生する低炭素社会をめざします。

都心のオフィスに
極限まで木質化する
SYNQAは、木質化することによって、どれだけ快適なオフィス空間を実現できるか、という挑戦でもあります。都市では建築物を木質化することは容易ではありません。大規模建築物を木質化する試みも本格化しつつあります。が、建築基準法や消防法などクリアし

なければならぬ問題はまだまだ多い。オフィスの多くはRC造の高層建築物の中にあります。オフィスの集中するテナントビルの中にどれだけ木質を持ち込めるか、と言って例えば六本木ヒルズにログハウスを持ち込むような発想はあまりにナンセンスです。SYNQAには、イトーキが現在持っている木質利用のリテラシーの粋を集めました。1〜3階あわせて延床面積3400㎡、ここに全体で55㎡の日本各地の国産材が活用されています。では、内部を見ていただきますでしょうか。



ソリューション開発統括部 Econif a 開発推進室の末宗浩一室長。イトーキの木質製品開発について分かりやすく教えていただきました。

販促プロモーション企画推進部 カスタマーリレーション戦略企画室の町田年英室長

Ecoソリューション企画推進部 Econif a 開発推進室の田淵陽子氏

都心のオフィスを「木」で満たすという試み

——木質感がいつぱいの空間という印象です。
ビジネスの新しいあり方を提案するオフィス空間

当初のコンセプトは木質化が主目的ではありませんでした。

今は多様な価値観が交差する時代です。ビジネススタイルも従来型ではない、新しいあり方や働き方が求められています。企業枠にとどまらない人と情報の流れ、新しい知の協業の場が必要と考えました。その提案が SYNQA です。ここはショールーム

り洗練されたデザイン耐久消費財として実用化させ、これをオフィスに供給しようとするものです。オフィスの木質化の追求は、都市での木材利用によるCO₂固定量を増やすことに貢献し、併せて国産資源活用によって森林機能をより促進させるエコソリューションです。
エコニファは、ポリシーのあり方だけににとどまらず、製品そのものの品質が喜ばれるレベルをめざします。真の快適さ「Ud (ユニバーサルデザイン)」と、地球環境の保全「Eco Design (エコデザイン)」とを融合させたコンセプトです。スギ、ヒノキ、カラマツなど地域材の特色を活かし、材の良さが製品価値に活かされた製品を開発する。ポリシーだけでなく、製品の良さがユーザーに求められるようにしたい。製品そのものの価値が評価され通用しないことには、木材流通は確かなものにならない。

地域材のブランド化に
貢献する事業として
2010年に公共建築物等木材利用促進法が成立しました。これは戸建ての住宅需要だけでなく、幅広く木材利用の可能性を拓けるものです。
国産材の活用と一口に言っても、総論では皆が賛成で、反対する人はいません。しかし、実際に売れるのかと言えは売れないというのが、これまでの世界でした。吉野スギや、飛騨ヒノキなどすでにブランドとして通用してきた材もありますが、ほとんどの地域材がまだブランド化されていないという状態にあります。地域産材の利用を促進するには、製品を通じて材の良さを評価してもらうことが必要です。私どもはそのブランド化に、製品づくりと流通を通して貢献したい。それがエコニファという事業の大きな骨子です。

レポート! 木の最前線

「木の最前線レポート」は、新しい「木」の時代を創出しようとする意欲的な挑戦をひろく紹介するコーナーです。今回は、中央区京橋3丁目に建つ「相互館110タワー」1〜3階にある、イトーキ東京イノベーションセンターSYNQA(シンカ)をお訪ねしました。株式会社イトーキは明治23年(1890年)創業の、歴史を誇るオフィス機器メーカーの老舗です。そのイトーキさんが昨年11月、都心に斬新なビジネス空間を誕生させました。今までにない「木」の空間が出現したと話題を呼んでいます。SYNQAとはどんな空間なのか? そのコンセプトは? どんな「木」の使われ方なのか?
株式会社イトーキのソリューション開発統括部Ecoソリューション企画推進部Econif a 開発推進室の末宗浩一室長に、この新しいビジネス空間について教えていただきました。



都心に出現した 新しい交流型の ビジネス空間

イトーキ東京イノベーションセンター

《SYNQA》の提案

外光もいっぱいに取り込んだ、開放的な空間の1階ネットワークカフェ。このカフェを含めて1階フロア全体がFSC森林認証・全体認証を取得しています。日本では7件目の快挙



※ FSCプロジェクト認証

FSCプロジェクト認証は、FSCが定めるFSC森林認証制度のうち「建造物」や「製造物」などをプロジェクト案件ごとに認証する仕組み。この認証には「全体認証」と「部分認証」があり、対象範囲内のすべての木質由来の素材がFSCの規格に沿った管理と認められた案件が全体認証で、より取得が難しいとされている。SYNQA1階フロアのFSCプロジェクト認証・全体認証は、世界で46件目、日本国内では7件目（2012年8月現在）、RC建築物のオフィスとしては日本初となる。

【サテライトオフィス】床はもちろん、カウンター、飾り棚、柱巻き、天井に至るまで地域材を活用しています。黒の飾り棚はカラマツを使い、フロアスペースには針葉樹材のラウンジチェア「ツイモ」を配置し、落ち着いた空間を演出しています。プリンターなどのツールがご利用できます。隣接したカフェではドリンクも販売しています。

【ライブラリー】電子書籍と出版書籍を一緒に利用できる書架で、タッチ式のモニターから検索ができ、タブレットの貸し出しもしています。ここで活

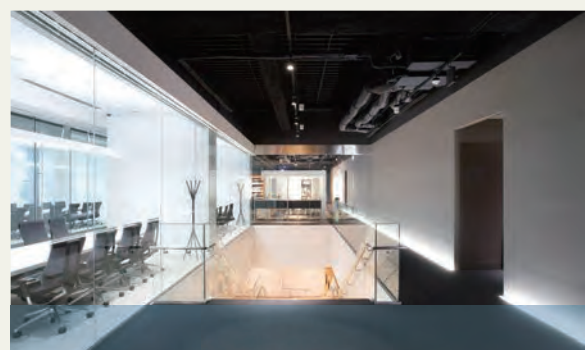
動するプロジェクトや個人の知識、情報を「見える化」するスペースです。この1階スペースは、「FSCプロジェクト認証・全体認証」※を取得しています。

2階、TEAM LABはプロジェクトルーム、プロジェクトブースからなる、プレゼンテーションやプロジェクトセミナーに使うフロアです。ブースの二にEconifa仕様のコア&セルのフレームや基本パーツを組み合わせて使う「アグラム」の床ユニットを置いています。

3階フロア、SYNCOFFICEは、イトーキのオフィスです。ここは社員自ら、SYNQAで得られた知見や、開発ソースをマッチングして新しいソリューションを生み出す実証実験の場です。フロア全体をぐるりと通る「スギの回廊」もその一つです。内装木材の使い方の通念として、スギは床材には不適とされていますが、ここではあえて廊下の床材として使用しました。

活動する人間を包む 素材に革命を

――本宗室長にお聞きしました。廊下の床材にあえてスギ材を使った意図について教えてください。



イトーキ東京イノベーションセンター SYNQA

所在地：東京都中央区京橋3-7-1 相互館110タワー1F～3F
〒104-0031

面積：延床面積 3,392㎡

仕様：相互館110タワースペック／S造(柱CFT)、RC造、免震構造
・免震構造によるSランク（最高グレード）の耐震性能
・CASBEEによるAランク相当の環境性能

(入居面積)

1階 外部交流スペース サテライトオフィスカフェ、ブランディングギャラリーなど (584㎡)

2階 共創型事業スペース セミナールーム、プロジェクトルーム、シアターなど (1,389㎡)

3階 オフィス イトーキ京橋オフィス (1,419㎡)

が、床面が凹凸状に変化してきました。社員の評判は悪くはありません。「木」の柔らかさを足下に感じながら歩くことは不快でしょうか。目で見てもしろ楽しくはありませんか？

木材は表面に節が見えます。衝撃を与えるとへこみます。しかし、それが木材を内装材に使うときの疎外要因でしょうか。建築材や内装材にこれまで求められてきた品質は、寸法が狂わない、傷つきにくい、経年変化しにくいといった要素でした。木材を使うことは木材の良さを認め、その性質を活かすことにあります。経年変化も木材の妙味ではないでしょうか。SYNQAには全国各地の地域材が使用されています。地方の林業関係者の方は、頻繁にここを訪れて、その経年変化もチェ

ックしていかれます。

活動する人間を包む素材に革命をもたらしたい。SYNQAが、ここをイノベーションセンターと自称するのは、これまでにない発想と価値観を生み出し、ここを常に新しい情報技術の発信地にしたいからです。



田淵さんにサルタスを紹介していただきました。ヒノキの集成材を使い、木が林立しているような雰囲気空間。スペースの大きさに合わせて自在な組み立てが可能



2階プロジェクトブースの一角。Econifa仕様のコア&セルのフレームや基本モジュールとなるパーツと組み合わせられる「アグラム」の床ユニット。重厚な木質感に圧倒されます



1階フロアのライブラリー。書架にある本だけでなく、電子書籍の検索、ダウンロードも可能。タブレットの貸付もあり

3階、イトーキのオフィス。フロア全体を取り巻くように設けられた「スギの回廊」。靴跡による凹凸が足裏に不思議な感触です。歩きやすさと木と同居している感じがたまりません

2階フロアの真ん中に設けられたくつろぎとコミュニケーションのスペース。



2階TEAM LABのフロアは、開放感と機密性とが絶妙に共存するスペース。プレゼンテーション、セミナー等、多用途性に富む空間です

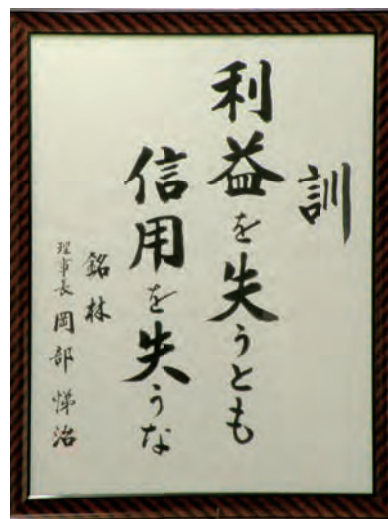
新木場 漫歩



株式会社 銘林

「木のまち 新木場」とその周辺エリアで気になる会社、企業、人物、スポットを紹介する新木場漫歩のコーナー。今回は新木場1丁目、木材・合板博物館のある新木場タワービルの隣にある「株式会社 銘林」さんをお訪ねしました。株式会社銘林さんの前身「協業組合 銘林」は昭和47年創業、昭和48年には新木場移転第一号組の企業として、新木場の歴史の一端を担ってきた老舗企業です。

代表取締役の森山文男氏、総務部の川畑公二氏のお二人にお話を伺いました。



「利益を失うとも信用を失うな」創業以来の社訓

銘木専門商社から総合木材商社へ

思いきった業態進化で、新しい木材流通のビジョンを探る



玄関前で、森山社長、川畑氏のお二人を撮らせていただきました

— 深川木場から新木場への移転第一号と伺っています

銘木の林、銘林の誕生

移転に先立つ昭和47年に、それぞれに歴史を持つ銘木業者10社が連合して「協業組合 銘林」を設立し、昭和48年に新木場に事務所を移転して営業を開始しました。東京都から無利子融資付の移転条件が提示され、それは格好の条件でした。当時は、高度経済成長が始まったばかりの頃で新卒の若い人は「金の卵」と呼ばれた時代です。一軒一軒、少人数の家族経営の銘木屋に、「金の卵」はそう簡単に来てはくれません。大きな組織に改変して近代経営化を図る必要に迫られていました。銘木の林、銘林

の誕生です。

移転当初は、まだ新木場のインフラも整備中でした。道路は出来ていましたが、鉄道はまだ通っていない頃です。バス路線もないので、東陽町からマイクロバスで社員を送迎していました。鉄道の開通はデイズニールランドが出来た頃だったと思います。駅がどこにできるかも未定でした。広い新木場のどこに居場所を定めるか、好きなどころに位置を占めて下さいということ、今の新木場1丁目に社屋を竣工しました。その後、続々と木場から新木場に移転が続いて、あつという間に新木場が「木のまち」に変貌し、最盛期は660社ほどが新木場で営業していました。高度成長期の需要増で、安い

外材輸入が盛んになり、当時の貯木場は一杯でした。製材業者さんも多くがここに工場を構えていました。今はほとんど姿を消してしまいましたが…。

— 東日本一帯に営業拠点を伸ばしていらつやいます

創業当初は、東京と千葉だけでしたが、その年のうちに仙台と水戸に営業所を開設し、翌昭和49年に静岡県清水、50年に新潟、札幌、秋田に営業所を設けました。当時の需要に追いつくためには東京から

だけではとても対応しきれない。機動力が問われていました。材木流通は、地方によって求めるものに違いがあり特色もあります。地域に密着して対応するためには、営業拠点を拡大することが急務でした。銘林は、一貫して地域密着型の営業展開をこころがけてきましたし、今もそれを目指しています。平成12年に「中小企業団体の組織に関する法律」の改正があり、これに伴って協業組合から株式会社銘林に組織変更し、現在14の営業所を展開しています。

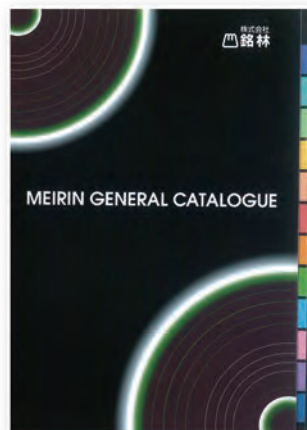
ですから在庫数はむしろ地方の営業拠



森山文男代表取締役。とてもざっくばらんなお話ぶりの社長です



総務部の川畑公二氏



アイテムの豊富さで300頁を越す大部の銘林総合カタログ。全ての製品に付された歩掛単価、設計単価などのデータは社員全員の力になった労作



点に厚い配置を行っています。在庫の種類も地方の需要に対応した内容にしています。地方に比べれば、東京は和室造作材の需要は少ないので、銘木の在庫も地方拠点の方が多いですね。

— 伝統的な銘木屋さんのイメージとは少し違うような…

時代への新しい対応——需要にマッチした営業力、機動力のあり方

銘林は、そういう意味では今までの伝統的な銘木屋ではないでしょうね（笑）。老舗といわれた大手の銘木屋さんが姿を消していくなかで、時代への新しい対応が求められています。古い銘木屋の商いでは、在庫の管理も無頓着なところがありました。月商の2倍、3倍の在庫を抱えていても、結果売ればいいという感覚が昔はあったと思います。自己資金の枠の中でやりくり出来る範囲でしたら、それでもいいでしょうが、多数の社員を抱え、融資を受けて経営する以上はそうはいかないんです。銘林には現在100名強の社員がいます。製品化工場を自社

内にもついていた頃は、社員は200人以上いました。製造部門を抱えるには難しさが伴います。現在、自社工場はなくし、和風の造作材や特注ものの製品化工程はアウトソースする形をとっています。既製品は資本参加の形で岐阜県恵那に工場をもっています。自社工場ですと、小規模経営のコスト安に太刀打ちできません。きちんとコストも在庫も管理する。その上で、需要にマッチしたきめ細かな営業を行う。ハウスメーカーさんは材料を自分のところで抱えるとコスト高になってしまふ。我々は、必要なものを機敏に現場に運ぶ、という流通の機動力でそれを支えます。銘林はお客様から図面をもらい、これに沿った歩掛計算をして見積りを作り、注文をもらいます。ここまでする営業できるころは多くはないと思いますよ。

銘林は平成15年から総合カタログを作

って、ほぼ毎年、内容を更新して頒布しています。床の間材に始まり、フローリングから商業空間、ウッドデッキに至るまで12分野の各種部材を掲載した300頁を越す大型カタログです、全ての製品に寸法、種類に応じた歩掛単価、設計価格を記載し、工務店さんも施主さんにカタログを使って説明してもらえように配慮した構成のカタログです。銘林の社員が総出でこのデータづくりをしています。これは営業力の基礎体力づくりでもあります。

旧来の経営手法から脱皮することが今の木材流通には求められています。

— 林野庁の後押しで国産材利用の促進が進められています

木材需要の新しいビジョンを模索

林野庁がやっと重い腰をあげて、公共建築物等木材利用促進法を施行しました

木材会館大ホールを会場に くらしと森林・木材の放射能をめぐるテーマで 公開シンポジウムを開催

7月18日（木）、新木場駅前の木材会館6階大ホールを会場に、（独）森林総合研究所主催による公開シンポジウム「私たちのくらしと森林・木材の放射能―森林総研が解き明かすその実態と今後」が開催され、7つの講演（研究発表）とパネルディスカッションが行われました。

このシンポジウムは、2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所の放射能事故以来、森林総研に寄せられた放射能汚染に関するさまざまな不安や質問に対し、研究所の調査結果をひろく紹介し、最新情報の共有、今後取り組みべき課題を議論する目的で開催されました。会場は事前申込者の約300人の出席者で一杯となりました。（以下、抄録で紹介。文責筆者）

森林総研の調査結果をばひろく紹介

講演のはじめは、高橋正通研究コーディネーターが原発事故後の調査研究のあらまし、各発表の要点紹介を行い、放射能汚染が森林の多面的な機能に深刻な影響

を及ぼし、事故の重大性と回復の必要性を訴え、以下に各氏の研究発表が続きました。立地環境研究領域長の金子真司氏からは、「放射性セシウムの蓄積と分布の変化を探る」と題して、原発から距離と汚染度の異なる福島県3箇所の調査結果の報告。水土保全研究領域長の坪山良夫氏は、「森林渓流水の放射性セシウムのモニタリングする」と題して、県内6箇所の森林からの渓流水の調査結果から全測定日の3%程度しか検出限界の1Bq/lを超えなかったことを報告。森林昆虫研究領域主任研究員の長谷川元洋氏は、「森林にすむ生物内の放射性物質」と題し、「ミミズとネズミの体内セシウム濃度の説明があり、落ち葉を餌とするミミズのセシウム濃度は餌の影響を受けやすいことを報告。木材特性研究領域長の高野勉氏からは、「木材中の放射性セシウムの動きを追う」と題し、樹木の樹皮、辺材、心材の比較で樹皮が最も高く、材の内部はきわめて低濃度で、木材を使った部屋で暮らす場合の追加被曝は小さいという計算結果が報告されました。

福島県木材業界による自主検査

パネルディスカッションは、講演を受け、会場からの質問に答える形で行われました。このなかでパネラーの一人、福島県木材協同組合連合会専務理事の宗形芳明氏は、福島県の木材業界は、製材品を安心して使っていただくため、各工場で出荷時に放射線量を独自に自主検査を行い、出荷を判断する目安として、1000cpm（カウント・パー・ミニッツ）※を自主管理基準としていることを報告。全ての測定結果は記録し保管しているの

注※ cpm（カウント・パー・ミニッツ）とは、放射線測定器に1分間に入ってきた放射線の数を示す単位。



パネラーに講演者も加わったで行われたパネルディスカッション



出席者で埋め尽くされた会場



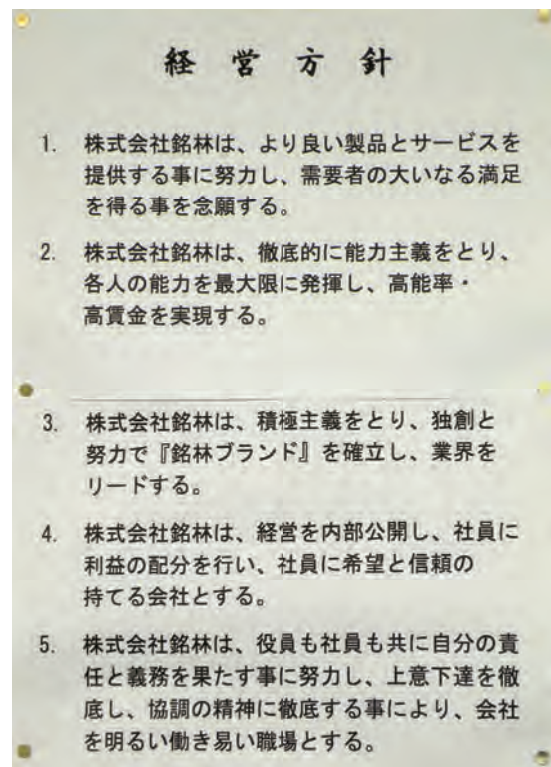
福島県の木材業界による製材品の自主検査について報告する、福島県木材協同組合連合会専務理事の宗形芳明氏

若い設計士さんは木についての知識、情報が乏しいので、ここにどうやって情報提供できるか。私どもには、どこにどのような材を使えばいいかというアドバ

今、ハウスメーカーの勢いが伸びています。住宅需要が大きくなることは歓迎ですが、そんななかで、地場の工務店さんが衰退しています。そこを何とか手助けできることはないかと、模索中です。ハウスメーカーさん任せでは、限りなく木材を使わない方向に進んでいく可能性も考えられます。ハウスメーカーさん私も私でもとって材をお納する大切なお客様ですが、今の若い施主さんは、モデルハウスを見て家の購入を計画します。そこにもっと木材活用をした住宅のあり方を提案していきたい。工務店さんに材木屋との提携をお奨めするとか、地場の関係者を集めた講習会を行うとか、私どもも提案型の営業力を養い、工務店さんにも施主さんに提案できるような仕組みを作りたいと思っています。

が、歓迎すべきことには違いありませんが、私に言わせてもらえば、あれは遅すぎるのではないかと。日本の林業に対して行政はもっとスピーディーに手を打つべきだったと思います。日本の木材需要は高度経済成長期を通じて、安い外材を使うようになりました。農産物については保護関税を課して自由化の波からガードし続けてきたのに、林業に関しては木材輸入へのガードは緩すぎたと思いますね。結果、日本の山林は担い手を失って、荒れ放題となりました。今、林道整備などに着手していますが、もっと早くにすべきことでした。

銘木に限らず今、木材流通は構造不況業種です。銘木の良さを伝えることはこれからも続けていきますけど、銘木にはこだわりません。それよりも木材流通のパイプをもっと太くしていくことに企業の使命を感じています。商品アイテムをもっと多様なものにし、木材利用の可能性を拡げることが必要です。そのためには銘木屋らしからぬと思われるような業態変化も何ら厭いません。今年JKホールディングスのグループに入りました。今度のJKフェアには銘木は出展しません。新しいアイテムを準備中です。旧来の、まだまだ売れるという生き残りの仕方ではなく、売る方法をアグレッシブに追求していく、木材需要の新しいかたちをつくることこそが私たちの課題です。



各部署のオフィスに張り出されている経営方針。毎朝、朝礼時に社員全員で唱和します



銘林オフィス。

受付で。お二人とも恥ずかしがってなかなかカメラを向いてもらえません。そのうちの貴重な一瞬

株式会社銘林さんは、木材・合板博物館のすぐ隣にあります。取材に伺うまで、その名から想像するとおりの伝統的な銘木屋さんのイメージを抱いていました。森山代表取締役は、古い木材流通の体質を脱ぎ捨て、新しい木材需要を造り出していくことが、今は求められている。そのためには「銘木は守り続けるが、銘木にはこだわらない」「銘木屋らしからぬ」業態変化にも積極的にチャレンジしていく。国産材利用の促進を後押しする法律が出来たが、それはほんの少しの追い風にすぎない。構造不況業種である木材流通をつくりかえるのは、木材屋自身の仕事だと言いつつ切ります。新しい木の時代の息吹は、それを先取りする人たちのところから吹き始めているように思いました。

（博物館スタッフ 長谷川麻紀



株式会社 銘林
〒136-8605 東京都江東区新木場1-7-6
TEL（総務部）03-3521-3140
（営業部）03-3521-3141
<http://meirin-shinkiba.com/>

